

先生の戦後 35 年

カトリック司祭 宮川俊行

「先生！先生にもとうとう平和が来ましたね。」先生の御遺体を前にして、思わず口を開いて出てきたのはこのつぶやきであった。戦火が収まっていますで 35 年以上も過ぎたというのに、先生のところには平和はまだ訪れていないかった。先生のまわりには恐ろしい原爆の嵐がたけり狂っていた。先生の耳には炎に焼かれながら助けを求める純女学徒隊員たちの叫びが聞こえていた。先生が眼を閉じると、生きながら燃えているあの生徒、この生徒の悲惨な姿が浮かび上がってきた。先生のところには安らぎはなかった。

先生のからだは被爆以来ずっと原爆症で苦しめられていた。しかしそれは先生の耐えておられたところの痛みに比べれば物の数ではなかった。原爆以来、先生のところが絶え間ない苦しみにさいなまれ続けていることを、私はふとしたことから知った。それは昭和 45 年の夏であったと思う。文教町(旧・家野町)の学園長室で先生と話していたが、談たまたま先の戦争のことには及んだとき、先生は急に語気を改め、実は自分は大変な過去を背負っている、こうして生きていることが苦しい、と言われた。「純女学徒隊」の名で工場に動員されていた二百十数名の教え子たちを原爆でむざむざ死なせてしまった、というのである。

先の大戦末期、戦局が厳しくなるにつれ、ますます深刻になってきた労働力不足を補うため、政府は学生・生徒たちを工場に駆り出した。これが「学徒動員」である。昭和 19 年 1 月「緊急学徒勤労動員方策要綱」、3 月「決戦非常措置要綱ニ基づク学徒勤労動員実施要綱」が決定。7 月、文部・厚生・軍需次官 謀牒「学徒勤労の徹底強化に関する件」。8 月「学徒勤労令」制定公布。20 年 3 月「決戦教育措置要綱」決定。5 月「戦時教育令」公布。

こうした中で学徒の通年動員の体制が確立され、時とともに動員は低学年に及んでいった。当時、私の住んでいた大村には東洋一と言わされた第 21 海軍航空廠^{しょう}があり、昭和 19 年 6 月から、大村中学校の 4 年生と 5 年生(現在の高校 1 年生と 2 年生)は学窓を離れて工場で軍需生産に専念し始め、9 月からは 3 年生も働くことになった。昭和 20 年 4 月になると、3 年生(現在の中学校 3 年生)以上が航空廠で労働に従事する一方、5 月には海軍航空廠の一部が大村中学(現在の大村高校)の一隅に疎開ってきて、そこが飛行機製作の部品工場となり、2 年生(現在の中学校 2 年生)が動員されて働き始めた。私たち中学校 1 年生は工場での労働は免れ、もっぱら食糧増産のための空地の開墾のためや、郊外農村の補助労働力として使用された。事情は地域や学校によって多少は違うが全国的に似たりよったりであった。勿論、男子だけでなく女子学生・生徒もひとしく駆り出されていた。大村にも県内や九州各地から航空廠のために多数の男女学生・生徒が集められていた。純心高等女学校も例外ではなく、戦争末期には 1 年生(現在の中学校 1 年生)を除く全員、すなわち最高学年の専攻科(現在の高校 2 年生)以下、4 年生(現在の高校 1 年生)、3 年生(現在の中学校 3 年生)、そして 2 年生(現在の中学校 2 年生)にいたるまでが、教師の引率の下、三菱造船所の大橋工場(25 工場)、浪の平町にあった三菱の疎開工場(28 工場)、時津と道の尾にあった民間の鉄工所で働いていた。動員された生徒たちは学校ごとに軍隊のように部隊の形をとり、学徒隊を作った。純心高等女学校の場合、「純女学徒隊」と呼ばれていた。

さて、先生の問題というのは次のことであった。3 年生に動員令が出た時、上からの指令では、全員浪の平工場に行くようになっていた。だが先生は戦局に頼みこんで一部を大橋工場に変更してもらった。大橋工場は学校の寄宿舎からも近いので通勤に便利だし、学校でも十分に監督できると思ったからであった。しかしそれが裏目に出た。大橋の生徒は全滅し、浪の平の生徒は全員助かった。もう一つは五島の若松から來ていた 2 年生のある生徒のことである。母親はひとり娘を、空襲の脅威にさらされているあぶない長崎に置きたくなかった。五島から漁船で危険を冒してわざわざ出てきて、わが子を連れ帰りたいと願い出

た。先生は政府の命令で国のために働いている動員学徒が爆撃がこわくて逃げ帰りたいとは何事か、帰りたければ退学届けを出してからにせよ、と厳しく叱りつけて母親を思いとどまらせた。その数日後、原爆でその生徒は大橋工場で即死。遺体も見つからなかつた…。

この生徒たちは、いい子ばかりであった。発育盛りなのに当時は食糧難で食べ物もろくろくなかった。現在のように衣類も思うように手に入るわけではなかった。静かに勉強らしい勉強もできないような戦時下であった。だが不平不満も口にせず、お国のために、と勤労奉仕に励み、軍需工場で厳しい重労働に精を出す、いじらしい子供たちであった。支給されたわずかばかりの報酬は家計の足しにと家に送る親思いの優しい娘たちであった。しかし可憐なこの子供たちは生きながら焼かれ、苦しみの中に悶え、水一杯もらえないまま、血を吐きながら死んでいった…。

この子たちの死には私に責任がある。私が死なせたようなものだ。私にはこうして生きている資格がない…。こう言って先生は声を出して泣かれた。

「先生、それは仕方のないことでした。先生には責任はありません。どこで1時間先に何に巻き込まれるかわからないのが世の常でしょう。同じ動員なら寄宿舎の近くの大橋工場で、という願いは、先生でなくとも、校長の立場にあれば誰もが持つはずのものですし、生徒の母親への言葉にしても、当時教育者として責任を負っている者として当然のものです。『自己の犠牲をいとわず、社会のために尽くせ』と言うことがどうしておかしいのですか。先生の言動は正しかった。生徒たちのために善いことだと信じてなさったことだし、しかもその時点でも、そして人として見通しのできる範囲内の状況の問題を考慮に入れて、何の落ち度もありません。もし原爆が浦上に落とされることがわかっていたとすれば、先生は必ず別の行動をとっておられたはずです。政府がポツダム宣言の受諾を拒み、ソビエトが参戦し、あせったアメリカは、あの日に2発目の原爆を投下すると決め、はじめ第1目標の小倉にやってきたB29はそこが投下に好ましくない状況だったため、やむを得ず50分後に方針を変えて第2目標の長崎に向かい、しかもその時の雲の事情から第1目標の市街地が見い出せず、第2目標の三菱兵器製作所に落とした、というわけです。偶然に偶然が重なってあのように成了ったのです。先生は問題を混同しておられる。生徒たちを殺したのは、アメリカ側の再三の警告にもかかわらず、国体にこだわっていつまでも降伏をしぶっていた日本政府と、あのような悲惨な結果を生み出すことがよくわかっているのに原爆をわざと落としたアメリカです…。」私の言葉もいつしかうわずっていたが、先生には聞こえないはずはないのに泣き続けられた。

私にも先生の気持ちはわからないではなかった。先生はこれまでいろいろな人にこの苦しみを打ち明けられたであろう。誰もが私の言ったことと似たり寄ったりの考えを述べたに違いない。しかし先生のところには納得できない何かがあったのだ。殉難学徒の親たちには、気にするな、と言って先生をいたわってくれた者も多かったであろう。しかし優しい言葉をかけられれば掛けられるほど、先生の良心はますます激しく先生を責めたてて止まなかつた。また、人は、あなたには神の前にも人の前にも責任はないのだから、いつまでもくよくよと過ぎ去ったことを悔やむのはおかしい、と忠告したこと也有つたであろう。しかし、先生にとって、倫理学の答など何の慰めにもなりえなかつた。「自分のとった行動や決定がなかつたら、あのかわいい子供たちは死なないですんだはずだ」という事実こそが先生を激しい悔いに駆り立て、日夜先生を苦しめ続けてきたのである。先生の気持ちは、この生徒たちが元通りの姿でこの世に生き返ってくるのでなければ落ちつくはずはなかつた。しかしこれは勿論不可能であった。先生のところがせめてものやすらぎを得るのは、ただ死んでいった二百余名の純女隊員自身から「ゆるす」と言ってもらえる時だけなのだ。彼女らから温かく天に迎え入れられ涙をぬぐってもらえるときだけなのだ。地上にある限り、先生の苦しみは続くであろう…。

涙でびしょびしょになった先生のしわだらけの顔を前にして、私は善良な老修道女をこれほどまでに苦しめる運命の残酷さを今さらのように思はずにはいられなかった。純女学徒隊の死の責任は日本政府とアメリカにある。彼らだけが、自分たちの行動や決断の結果がどうなるかを予見できたのであり、彼らだけが、この悲惨な結果を防ぐための別の行動をとり、別の決断をすることができた。しかしそれを彼らはやらなかつた。一切の責任を彼らが負わねばならない。理論的に見ればこれは明らかである。しかし、それだけでは割り切れないのが現実である。この世界の複雑な諸原因のからまり合いの中で、いろいろな出来事が起つたり、反応し合い、人は生きている限り自分の意志と関係なくそれにいやおうなしに巻き込まれる。これが運命である。自分は意図していなかつたにもかかわらず、いや自分は反対であるにもかかわらず、自分の言動や決定や、身体が、人の死をひきおこした因果関連の複雑なからまりの中に偶然に入り込んでいたというだけで、責任をとらなければならない、という不合理なこともあります、心理的に大変な苦しみの中に投げ込まれる悲惨な人もある。使いに出した子供が乗っていた電車の交通事故に巻き込まれて死亡したため、使いに出したことを、気が狂うほどに悔やんでいる親もあろう。学校に行きたくない、という子供を、怠けぐせがついてはよくない、と思い、厳しく叱りつけて登校させたが、泣く泣く家を出ていったその子が、帰校の際、通り魔に刺されて死亡した、という時の親の気持ちはどうであろう。この世には、このたぐいの不運に巻き込まれ、どれほどたくさん的人が苦しみ、悔やみの涙がどれほど流されたことであろう。先生の巻き込まれたのもまさにこのような不運に他ならなかつた。生徒たちの運が悪かったのであつた。それゆえに先生も運が悪かったのであつた。先生は殉難純女学徒たちと全く同じく、運命の被害者であり原爆の犠牲者であった。「なぜ、この子供たちがここにいるとき、ここに原爆が落とされなければならなかつたのでしょうか。」と先生は涙の中から神に悲痛な叫びをあげた。しかし答えはなかつた。偶然が高潔な人すたいる格である先生を翻弄し、先生を呵責の獄舎にたたき込んだのだ。先生はむごい運命が先生に負わせた重荷を背に孤独の人生を送らねばならなかつた。それが神の定めであつた。

* * * * *

先生はしかしこのように過去を悔い悲しみ、殉難学徒たちの前に頭を垂れ詫びの涙の中に時を過ごしただけではなかつた。これは先生的一面にすぎなかつた。爆風で傷つき、からだ一面に黒い斑点が出て、一度は死の宣告さえ受けたとはいえ、先生が生き延びえたのは事実であった。聰明な先生はここに、先生に特別に生存を許した神のご意思を読みとろうとした。九死に一生を得て生き残った自分の生に積極的な意味を見いだそうとした。

まずそれは自分の生を、これら殉難の教え子たちの弔いのために捧げるということであった。このような形で彼女らのために生きることであった。先生の抱くカトリックの信仰によれば、死はこの地上の終わりではあっても、人は死によって虚無になるのでも無窮の大自然の中に呑み込まれてしまうのでもない。神のもとにおける「永遠の生命」が人には可能である。人の決定的な幸不幸は、^{いづ}にかかってこの「永遠の生命」に達するか否かにある。悲惨な死はたしかに地上のわれわれにとっては全力をあげて阻止すべき惡だが、それはその人の本当の不幸を意味するのではない。こうして先生の関心は、神が殉難の教え子たちに永遠の幸せを与えてくださるよう真剣に祈ることにおのずと向いていった。この生徒たちのために自分にできる最大の事はこれであると確信していた先生は、あらゆる人々に祈りを願つてまわられた。

この願いは学校の再建と発展に掛ける先生の情熱の大きな原動力でもあった。学園が栄えれば、亡き純女学徒隊員がよく弔ってもらえるから、と先生は懸命に復興に打ち込まれた。校墓はすでに昭和24年に建てられ、『純女学徒隊殉難の記録』も昭和36年にはまとめられた。学園の発展もめざましく、殉難学徒の後輩の女生徒たちが年々数百人ずつ学園を巣立つて行き、こうして殉難純女学徒隊員のために祈りを捧

げる人の輪はぐんぐんと大きくなつていった。

弔いの問題の見通しが立つと、先生の生き方には、さらに新たな面が加えられた。

先生は自分の生を殉難純女学徒隊員の身代わりの生としようとした。彼女らが生きていたならば行つたであろうということを自分が代わつて行う、というのである。神が自分にこのように命を与えてくださっているのは、これら殉難の教え子たちが行つたはずのことを自分が実現するためだ、と考えたのである。自分の生は、実は自分の中に生き続ける殉難学徒の生に他ならないのだ、というのである。

具体的には、それは原爆の被害を受けた老人たちの世話であった。親思いのあの生徒たちのことである。生きていたら年老いた親をどれほどいたわり優しく世話をしたであろうか。優しい心の彼女たちは原爆孤老を見捨てておくことはできなかつたに違ひない。在天の彼女らには、自分たちと同じく原爆を受け、一命は取り留めたが、身寄りもなく孤独の中に後遺症に苦しめられ、身体的にも精神的にも社会的にも重荷を負いつつ生きている老人たちを見るのは、さぞやりきれない思いであろう。彼女らに代わつて、この人たちの世話をしよう。これは彼女らに対する、生き残つた自分の務めである…。これが先生の考えであった。

こうして先生は三ッ山に原爆ホームを建設することに力を注がれた。昭和45年4月、恵の丘長崎原爆ホームの本館ができ、最後の仕事としてすべてを掛けておられた別館も、昭和55年夏にはやっと完成した。7月12日の別館の落成式で、先生は来賓・職員一同の前で話をされ、恵の丘原爆ホームを殉難純女学徒隊員と結びつけられた。これが人前で話をされる最後の機会となつた。その後、先生は、病の床に就かれ再び床を出られることはなかつた。11月30日、神は先生を地上の教え子たちのもとから在天の教え子たちのところへと移された。

殉難学徒隊員との関係を抜きにして戦後の先生を理解できないと私は思う。先生の35年は彼女らに詫びる涙の生であり、彼女らの供養のための祈りの生であり、彼女らに代わつて生きる奉仕の生であった。

しかし同時に、私たちは、このことが先生の活動にとって何らかの制約を意味しているのではなかつた、という面をも見落としてはならないであろう。殉難学徒隊員への愛が先生のこころをどれほど占め、また動機として強く動かしていようと、外に現れ出てくる先生の活動や言動はそれ自体で独立の存在と働きをもつものとして教え子たちと関わる力を備えていた。先生は殉難生徒だけの先生ではなくいつも学園の卒業生・在校生全員の先生であった。先生の作られた純心女子学園は殉難純女学徒隊との関わりなしに、客観的に独立の存在と意味を持ち、社会的役割を果たす公的な教育機関であった。

事実この二面は先生においては決して矛盾し排除しあうものではなかつた。根においては一つであつた。教育のために預かった子供たちの死に、たまたま自分があのようない形で関わつてしまつたということは先生にとっては被爆後35年の生を規定しつづける大事件であったが、このような生き方は、教育というものにかける先生の真剣な姿勢そのものから、いわば自然に生み出されたものにすぎなかつた。先生にとって教育は人格の中核より炎としてほとばしり出て、一人ひとりの学生・生徒の人格へ向かい、共に燃え上がるべくこれを変容していく愛の活動そのものであった。だから先生の教え子たちは誰もが自分は先生からひじょうに愛されていると感じることができた。そしてそこにはたしかに根拠があつた。先生のこころは殉難生徒だけで一杯になるほど狭いものでなくすべての在校生・卒業生が包み込まれうる広いものであつたからだ。また先生の教育者としての気迫は教え子の一人ひとりをかけがえのない人格として直接捉える力を持っていた。先生は純心女子学園の卒業生・在校生の誰にとっても、殉難した教え子たちにとってと全く同じように、私の先生であり、私のために生きていてくださる方であつた。